

## 日本音楽学会国際研究奨励金 受領者報告書

報告者: お茶の水女子大学 リーダーシップ養成教育研究センター 講師 (研究機関研究員)

田崎直美(東日本支部)

### 1. 発表学会について

参加学会: 国際音楽学会東アジア連合 第2回大会 2013 台北

The Second Biennial Conference of the East Asian Regional Association of the  
International Musicological Society (IMS-EA), 2013, Taipei

テーマ: 移行する世界情勢の中の音楽 Musics in the shifting global order

開催日程: 2013年10月18日(金)~20日(日)

開催地: National Taiwan University, Taipei, Taiwan (国立台湾大学、台北 (台湾))

国際音楽学会(IMS)の地方連合 regional association の一つとして2年前に東アジア連合(IMS-EA)が発足、第1回大会がソウル大学(大韓民国)で開催された。この時の総会にて、今後連合内の各国持ち回りで2年おきに大会を開催する旨が確認された。本学会は、予定通り2回目として開催された東アジア地区における音楽学の国際学会である。初日には南管 Nanguan 演奏を伴った開会式、2日目には E.Taylor Atkins 氏による基調講演、最終日には今回のテーマに関する IMS ラウンド・テーブルおよびブヌン族による演奏があり、その間に計100名弱の参加者による個人発表、ラウンドテーブル、パネル、ポスターセッションが行われた。

報告者はこの第1回大会に発表者として参加経験がある。この時すでに、礼節を重んじるアジア文化を各国の参加者が共有する温かい雰囲気、会場にあった。今回の大会もそうした雰囲気を受け継いだかのように、アジア各国をはじめヨーロッパ地域からも参加された国際音楽学会理事や委員の方々のご支援、そしてこの大会のために尽力下さった国立台湾大学スタッフの温かいホスピタリティを、至る所で感じた。前回との相違点としては、参加者数が格段に増えたこと、そして台湾という事情が関係したのか、前回はあまりいなかった中国からの参加者が多く見受けられたこと、がある。

学会初日の午前には、学生ボランティアによるキャンパス案内ツアー Morning Walk 企画があった。報告者はこちらにも参加して、日本統治時代の歴史的建造物や造園に関する興味深い説明を聞くことができた。今回の学会には日本人参加者も多く、同じツアーに参加した先生方、2日目夜の懇親会で知り合った研究者たちとの交流も印象深く心に残っている。

## 2. 研究発表要旨

セッション: Session 2C-2 “Representations and Identifications in Post-War Periods”

(戦後期における(音楽による)表象およびアイデンティティ形成)

発表日時: 2013年10月18日(金)16:30-17:00

発表のタイトル: The early period of the *Radiodiffusion Française* (1945–54) and cultural strategies on music: international exchange activities

(初期国営ラジオ局 *Radiodiffusion Française* (1945–54) における音楽戦略: 国際交流活動を中心に)

第二次世界大戦直後のフランスでは国内の復興とともに冷戦や植民地戦争への対応がせまられ、政治的にも経済的にも不安定な状態にあった。そうした中、情報省管轄下でフランス国内の放送網を事実上独占していた「国営ラジオ局 *Radiodiffusion Française*」は1947年に発表した「交流政策 *la politique de liaison*」で、フランス文化の国外発信に強い意欲をみせている。ラジオの国際的放送交換の流通を発達させることで、最終的には外国でフランスの番組を広く知らしめることが目的であった。本研究では芸術音楽の領域で「国営ラジオ局」が行った外国との放送番組交換およびラジオ放送楽団の外国公演時の演奏曲目の視点から公文書や演奏記録を調査し、上記交流政策との関連について検証と考察を行った。

「国営ラジオ局」が音楽分野で図った国際交流は、(1)外国との放送番組交換、および(2)外国との人的交流、すなわち、それぞれの国が有するラジオ放送楽団の演奏会での外国人演奏家の招聘やラジオ放送楽団の外国公演、に大別できる。(1)でも(2)でも、相手国により「国営ラジオ局」側の対応が異なることが確認できた。まず(1)についてみると、スイスとベルギーの放送局とは1945年から対等な立場で現代音楽を含む芸術音楽番組の交換が行われていたのに対して、英国とアメリカ合衆国の放送局とは、初期においては相手国から一方的に番組を受け取る立場であったこと、受け取る番組の大半は大衆音楽であったことが判明した。(2)では、今回は、フランス国立管弦楽団 *Orchestre national de France* に焦点を当てて調査した。そして、ベルギーとは1946年に交換演奏会 *Échange d'Orchestres*、すなわち自国の「現代音楽」を相手国で上演すると引き換えに相手国の「現代音楽」を自国で上演する活動、が始まったのに対して、1948年アメリカ合衆国への初の演奏旅行では「定番」フランス音楽による演奏プログラムであった。

今回の調査の結果、「国営ラジオ局」は「フランス現代音楽の上演」が相手国への文化進出の鍵と捉えていたことが浮かび上がってきた。そのように仮定した時、新たな政治的関係構築を模索し始めていた西ドイツへのフランス国立管弦楽団の演奏曲目の傾向が1950年頃を境に変化している点が注目される。1948年バーデン＝バーデン(当時は仏占領地)への演奏旅行ではパリ解放直後に展開されたドイツ占領政策への反動の一環であった「ストラヴィンスキー音楽祭」を行ったのに対して、1951年には仏・独境双方の定番作品が半分ずつ用意された。そして1952年の4都市演奏旅行では、うち2都市において、フランス現代

音楽のみのプログラムを提供したのである。このフランス現代音楽プログラムは当時の西ドイツの聴衆には人気がなかったことが判明したが、「国営ラジオ局」はこの演奏会をフランス国内で放送している。

国際交流の場における「フランス現代音楽の上演」は、フランス国内における一種の文化改革にもつながった可能性も指摘できる。「国営ラジオ局」音楽部門監督は、フランス人聴衆のドイツ・ロマン派音楽偏向からの脱却および「フランス現代音楽」によるフランス人としてのアイデンティティ高揚を方針に掲げていた。フランス国立管弦楽団が外国で「フランス現代音楽を上演」したという実績を作ることは、先述した音楽部門監督の方針をフランス国内にて正当化するという点で重要な意義を担った、と考えられるのである。

### 3. 質疑、反響と感想

他の多くの発表者と同様、報告者は配布資料なしでパワーポイントのみを発表に使用した。Windows 搭載のパソコンが各教室に備え付けられているという事前の話であったが、報告者は念のため USB メモリーだけでなくノートパソコン本体も持参した。これは正解だった。教室により事情が異なったようだが、報告者の発表教室の備え付けパソコンは接続不安定だったらしく、使用中止になってしまったのだ。一方反省点として、発表中に手元が予想以上に暗いことに気付き、原稿を読み上げるのに苦労した点が挙げられる。次回からはこうした状況も念頭に置き、小型ライトを準備しようと考えている。

質疑は主に司会者から頂いた。まず「国営ラジオ局」組織に関して、予算に関して、そしてプログラム決定者に関して、の質問であった。重要だが発表時間内に情報が盛り込めなかった部分なので、用意していた別スライドを使用して説明を行った。その後、フランスのラジオ放送において「フランス音楽が 60%を占めるべき」という規定が 1970 年代にはあったが当時はどうだったのか、という質問を頂いた。実は今回研究対象とした「国営ラジオ局」でも 1947 年時点には「フランス音楽がプログラムの 3分の2を占めるべき」という内部規定が存在したことを報告した。最後に司会者から、大変興味深い発表で貴重な情報をいろいろ教えてもらった、と好意的な感想をいただくことができた。しかし今後はもう少しフロアでの議論が自然に活発化するような工夫も必要だと感じている。

外国語(英語)での発表という点に関して改めて感じたことは、特に質疑応答の場面でそうであるが、流暢に話す方のペースに飲み込まれることなく自分のペースを維持することの大切さであった。もっともこれは日本語発表の場合でも全く同じである。適切な「伝える内容」と「その伝え方」に最大限の注意を払う習慣(訓練)を日頃から怠らないことの重要性を認識した次第であった。

最後に、今回発表した研究は JSPS 科研費 21720047 (平成 24 年度) 助成による成果の一部であることをご報告申し上げますとともに、そしてこのような貴重な体験を支援して下さいました「日本音楽学会国際研究奨励金」選考委員会および住友生命保険相互会社に、改め

て感謝の意を表します。